

山崎山古墳群

発掘調査報告

県道竹野久美浜線道路改良工事に伴う

山崎山3・4・5号墳の発掘調査

1994年

兵庫県教育委員会



調査区(白山市上郷町年島村)

山崎山古墳群
発掘調査報告

例　　言

1. この報告書は、県道竹野久美浜線道路改良工事に伴って行った、城崎郡竹野町羽入字ジャガシラの山上に所在する「山崎山古墳群」3・4・5号墳の発掘調査記録である。
2. 発掘調査は平成5年10月13日から同年11月9日までの期間に行ない、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の平田博幸と井本有二の2名が調査にあたった。
3. 本報告書において使用する2500分の1地形図は、国土地理院「城崎」・「香住」を使用し、その位置図については兵庫県豊岡土木事務所作成の工事計画図を原図として利用した。また、遺構図・調査区平面図等については平田と井本が現地で実測した。
4. 本報告書刊行に伴う整理事業は、平成6年7月から8月にかけて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所整理普及班・中川涉の事業管理の元、神戸市兵庫区荒田町の同事務所において行った。執筆・編集は平田・井本を中心として、嘱託職員の本庭田英子・香川フジ子・蓬萊洋子・西野淳子・島村順子・竹内泰子・松村馨で行なった。
5. ここに使用した遺物出土状況写真・遺構写真的撮影は、平田・井本の2名が現地において行い、遺物整理後の写真撮影は株式会社吉田カメラ商会に委託して行った。
6. 出土した鉄器については同調査事務所の加古千恵子の指示の元、嘱託職員の和田寿佐子・喜多山好子・村上京子が保存処理を行った。
7. 遺物をはじめ、記録保存に伴う図面・写真はすべて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において保管している。

本文目次

第1章 調査前夜

第1節 調査に至る経過	1
第2節 山崎山古墳群と周辺遺跡	2

第2章 遺跡の調査

第1節 調査の概要	5
第2節 遺跡の概要	8
第3節 各古墳の調査	
a. 3号墳の調査	11
b. 3号墳西斜面の調査	12
c. 4号墳の調査	13
d. 5号墳の調査	14
第4節 出土遺物	
a. 土器	17
b. 鉄器	18

第3章 まとめにかえて	19
-------------------	----

調査後記	24
------------	----

挿 図 目 次

第1図：周辺の遺跡	3
第2図：調査区位置図	5
第3図：調査前の調査区地形図	6
第4図：調査後の調査区地形図および遺構配置図	7
第5図：調査区横断土層断面図	8
第6図：調査区縦断土層断面図	9
第7図：3号墳遺構図	11
第8図：3号墳主体部遺構図	12
第9図：4号墳遺構図	13
第10図：4号墳第1主体部遺構図	14
第11図：4号墳第2主体部遺構図	14
第12図：4・5号墳間区画溝内土器出土状況図	15
第13図：5号墳遺構図	16
第14図：5号墳主体部遺構図	16
第15図：出土土器	17
第16図：5号墳主体部内出土鉄器	18
第17図：竹野町内古墳時代遺跡分布図	22
第18図：山崎山古墳群分布図	23

表 目 次

表1：周辺遺跡地名表	4
表2：各古墳規模一覧	10

カ ラ 一 写 真 図 版

カラー図版 上：竹野川遠望（河口より上流をみる）

下：調査区全景（上空より）

写真図版目次

- 図版 1 上：調査区遠景（西上空より）
中：同上（北より）
下：調査区からの遠望（北をみる）
- 図版 2 上：調査前全景（北より）
中：調査後全景（北より）
下：同 上（南より）
- 図版 3 上：3号墳全景（北より）
中：主体部および木棺検出状況（南より）
下：主体部完掘状況（南より）
- 図版 4 上：4号墳全景（北より）
中：第1主体部木棺検出状況（東より）
下：第1主体部木棺完掘状況（西より）
- 図版 5 上：第2主体部完掘状況（西より）
中：4・5号墳間区画溝内土器出土状況（東より）
下：3号墳西裾部土器出土状況
- 図版 6 上：5号墳全景（北より）
中：木棺検出状況（南より）
下：木棺完掘状況（南より）
- 図版 7 上：主体部完掘状況（南より）
中：北小口の状況（南より）
下：鉄器出土状況（南より）
- 図版 8 上：2・3号墳間区画溝（北東より）
中：同上断面（西より）
下：3号墳墳丘高まり（北より）
- 図版 9 全：各古墳出土の遺物

第1章 調査前夜

第1節 調査に至る経過

兵庫県の北半域を占めるのが旧国「但馬」である。海・山をもつこの地域は変化に富んだ自然を生み出し、四季をとおして多くの人達にひたしまれている。ただ阪神間から遠く離れ、但馬空港が開港したとはいいうものの交通の便は悪いえに、但馬独特の冬の厳しさはことばに尽くせないものがある。竹野町もこうした但馬地域の典型的な自治体のひとつである。面積からみれば狭い町域であるが、北は日本海に続き、南は神鍋高原のふもとに至る細長い町域のため変化に富んだ自然環境を育んでいる。

同町の平野部は、町域の中央部を北流する竹野川に沿って細長く形成されている。平野部の周囲は山々に囲まれ、それがそのまま町境となっているため、町内からの出入りは海岸沿いの第二但馬海岸道路、町域の中央部を東西に走る国道178号線、神鍋高原の麓から竹野川に沿って北進する県道竹野久美浜線、さらに阿金谷からJR山陰線に沿いに鉄物師戻峠を越えて城崎市街地に至る同じ県道竹野久美浜線の4ルートとなっている。そのうち県道竹野久美浜線は竹野川右岸の幹線道路であるが、山間部を越える鉄物師戻峠はその輻員も狭いえにカーブも多く、通行困難な箇所もあるため兵庫県豊岡土木事務所では順次道路の改良事業を推進してきた。

この道路改良事業の一貫として同町羽入の字ジャガシラで道路の拡幅工事が計画されたが、そこには「山崎山古墳群」の存在が周知されていた。兵庫県教育委員会としては、同古墳群の立地場所からみて現状保存を行うことも可能ではないかと判断し、その協議を行う資料を得るために平成2年に現地の踏査を行い、古墳群の現状の把握を行った。この踏査により、改良事業対象地内に明らかに古墳と認識される隆起地形を2箇所確認するとともに、対象地外の尾根づたいにも同様の地形が数箇所連続することを確認した。こうしたことから間違いなく2基以上の古墳がそこに存在していることが明らかとなったため、豊岡土木事務所に道路法面の工法変更等により古墳群を現状保存することを要望した。これを受けた同土木事務所では、古墳を保存するために工法を変更することに協力してもよいということで、再度古墳の取り扱いについて協議を行った。そこで古墳を現状保存するために必要な境界を現地において明示し、その境界線で工事の施工が可能ならば、現状保存を行う方向で改良事業をすすめることとし、その境界線の現地立会を、平成3年8月に現地に詳しい竹野町教育委員会の山崎守氏に急遽依頼した（この時点では「山崎遺跡」と呼称）。この現地立会時の境界線の測量結果をもとに同土木事務所で工法の変更を検討したところ、この遺跡回避ラインに沿って法面を切ることが不可能なことが判明したため、最終的な同古墳群の取り扱いについて協議を行った。ここで、土木工法上現状保存することが不可能であることを最終確認したうえ、現状保存に変わる記録保存が必要な旨を伝え、同事務所長からの調査の依頼を受け平成5年10月より工事区域にかかる2基の古墳の全面調査を行った。

この調査の実施に際し全面的な協力を下さった兵庫県豊岡土木事務所の担当者の方々ならび、数々の便宜を図ってくださった竹野町教育委員会及び地元羽入地区の方々をはじめ関係諸機関の方々に心より深く感謝申し上げます。

第2節 山崎山古墳群と周辺遺跡

竹野町は、南北に細長い谷の中央を、三川山系を分水嶺とする竹野川が北流する。また、海に面しているという地の理を活かし古くは製塩をおこなっており、塩浜村とも呼ばれていた時期もある。近世においては港町として栄え、遠く蝦夷地・九州・大阪に回航する海運業が但馬地域で最も盛んに行われた場所であるが、近年は海水浴場として毎夏多くの観光客が訪れている。海岸線一帯は山地が海に迫ってリアス式海岸を形成しており、山陰海岸国立公園に指定されている。平野部およびその周辺の山麓や尾根には多くの遺跡が埋蔵されていると考えられる。山崎山古墳群もそのひとつである。

山崎山古墳群は竹野川を河口から南に約3km遡った右岸、羽入字ジャガシラに位置する。古墳群は城崎町に抜ける鈴物師戻時の谷口北側の山塊上に展開するが、今回調査した支群は川に沿って北に延びる尾根の先端に位置する。古墳群は海岸に向かって広がる平野を一望できる位置にある。

竹野町でも多くの古墳が知られているが、調査された事例が少い。南アンジャ古墳では須恵器の出土が知られており、現在町民会館に保管されている。ヨゴレババ1・2号墳はいずれも横穴式石室を持つ円墳であるが、2号墳の石室は三角隔持ち送り構造によって構築されているため、渡来人の墓ではないかと考えられている。この他、ミヨズ古墳・才の神古墳及び、大谷古墳などの古墳が周知されているが、古墳の時期をはじめ規模や内容の詳細を知りうる資料はきわめて少ない現状である。北但馬地域では後期の横穴墓が多く確認されている。本調査区の丘陵鞍部にもかつて阿金谷横穴墓群があり、7基が確認されている。そこから出土した須恵器、玉類は保管されているが、横穴墓群は道路工事等により消滅している。こうしたことから、町内には未発見の横穴がまだ残っている可能性が高い。

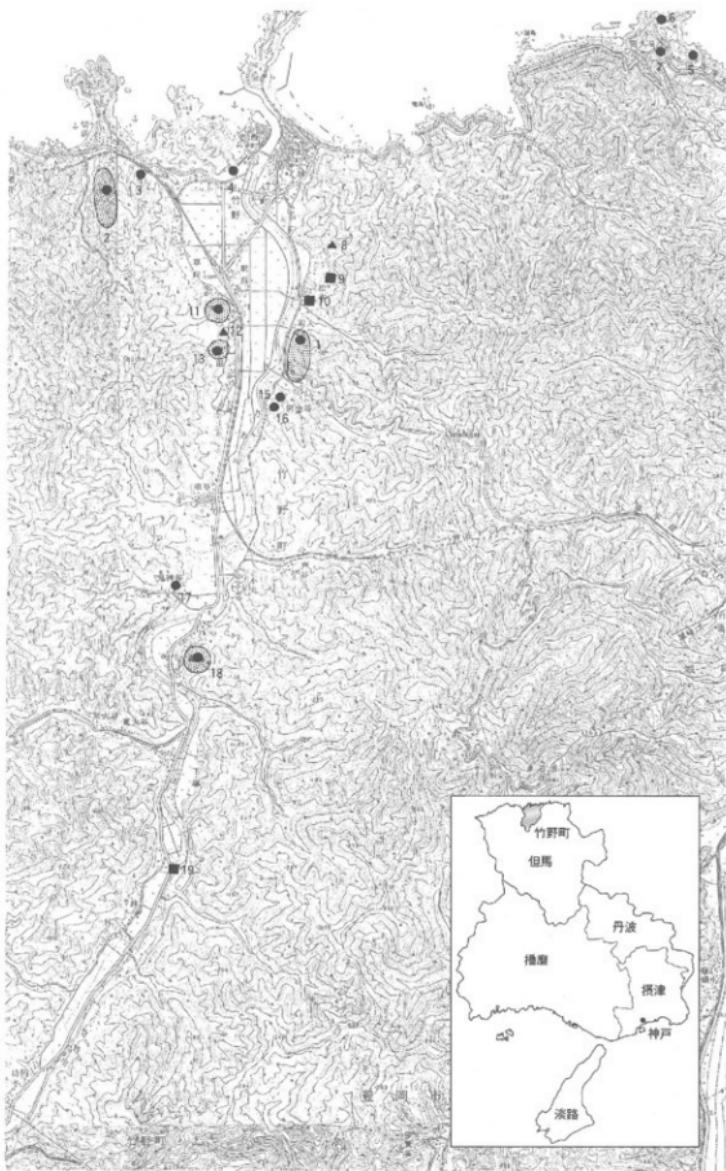
当調査地より約0.5km南方の須谷地区の丘陵部に弥生時代後期から古墳時代初頭に築造されたと思われる出持地遺跡がある。9×16m規模の方形台状墓が調査されている。14基の主体部が確認されており、そのいずれも木棺を直葬したものである。埴尾を切断した溝内からは、胴部と頸部に円形竹管文を施した壺形土器が出土しており、山陰地方の墳墓から出土する土器との類似が指摘できる。出持地遺跡の北の尾根上は阿金谷古墳群があり、山崎山古墳群と同様の様相を呈している。竹野町では弥生時代の遺跡、とくに弥生時代前期～中期の明確な遺構はまだ確認されていない。

他に当遺跡近隣には、約0.5km北に小森岡遺跡、その北の丘陵鞍部に広がる見蔵岡遺跡がある。小森岡遺跡は縄文時代の遺跡で、確認調査が行われた際に、前期後葉の北白川下層Ⅲ式から後期の中津式、福田KⅡ式の土器や、縁帶文土器が多量に出土している。その他に石器、漁撈具も多くみられる。他に楕字堂ノ神遺跡があり有舌尖頭器や爪形文土器と考えられている土器片が出土している。この遺跡のはじまりは草創期まで遡り、出土遺物から前中期まで存続していたと考えられている。黒曜石の製品・剥片などの分布密度は高く、石材の産地分析の結果、島根県隠岐の久見原産のものと推測されている。土生谷遺跡、三味ヶ岡遺跡でも縁帶文土器が採集されているが、その実態は明らかではない。

見蔵岡遺跡では、確認調査で古墳時代後期から奈良・平安時代の遺構が確認され、それに伴う遺物も多数出土している。現在調査が行われているので、その結果に期待したい。

但馬地域最古の須恵器窯跡である鬼神谷窯跡は、須恵器生産が各地に拡散した陶邑編年TK23～MT15型式に併行する地方窯で、円山川流域の古墳にまでその製品を供給していた事が確認されている。

奈良時代以降の遺跡は、町内中央部の森本近辺に認められている。太田遺跡・羽入遺跡などは土器散布地として周知されているが、未調査のためその規模・性格などは明らかにされていない。本調査地の



第1図 周辺の遺跡

周辺は竹野町の歴史を考える上で重要な地域であり、今後の調査により町の歴史がより具体的に解明されていくと思われる。

以前山崎山3号墳の北側（尾根の先端部）で、内面に赤色顔料の付着した組合式の箱式石棺の材が、土取り作業中に偶然に発見されている。連絡を受けて急遽現地調査を行われた同町教育委員会の文化財担当者の方のお話では、それらの石材は後世に二次埋設されたものであり、まったく原状を失っていた。現在この石材は県道脇の広場の片隅に保管されている。

〈参考文献〉

橋本誠一ほか『但馬・阿金谷古墳群の調査』竹野町教育委員会 1977年

高松龍輝ほか『堂ノ上遺跡確認調査報告書』竹野町文化財調査報告書 第5集 1987年

竹内理三ほか『角川日本地名大辞典』「28. 兵庫県」 角川書店 1978年

長谷正行ほか『兵庫県大百科事典 下巻』 神戸新聞出版センター 1982年

兵庫県教育委員会『埋蔵文化財分布地図及び地名表』第9集 兵庫県教育委員会 1972年

高松龍輝ほか『竹野町史』 竹野町史編纂委員会 1990年

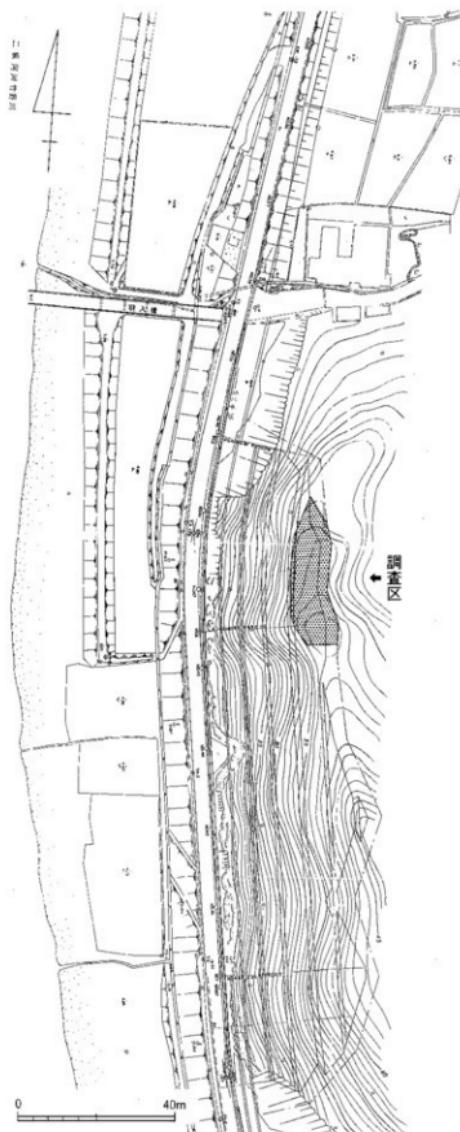
表1 周辺遺跡地名表

番 号	遺 跡 名	種 別	時 期	所 在 地
1	山 岐 山 古 墓 群	古 墓	古 墓 後 期	羽入字ジャガシラ
2	タ マ ヤ マ 遺 跡	散 布 地	古 墓 後 期	切浜字タマタヤ
3	切 浜 遺 跡	散 布 地	古 墓 後 期	切浜
4	南 アン ジヤ 古 墓	古 墓	古 墓 後 期	竹野字南アンジヤ
5	ヨ ゴ レ バ バ 古 墓	古 墓	古 墓 後 期	田久井字坊主が鳴
6	オ の 神 古 墓	古 墓	古 墓 後 期	田久井字オの神
7	ミ ョ ズ 古 墓	古 墓	古 墓 後 期	田久井字大カリュウ
8	見 故 囲 遺 跡	遺 跡	弥 生～中世	松本字見敷岡
9	土 生 谷 遺 跡	散 布 地	绳 文	松本字土生谷
10	小 森 囲 遺 跡	遺 跡	绳 文	松本字小森岡
11	太 田 古 墓 群	古 墓	古 墓 前 期	和田字太田
12	太 田 遺 跡	散 布 地	古 墓～中世	和田字太田口
13	竹 ピ 古 墓	古 墓	古 墓 前 期	和田字竹ピ
14	阿 金 谷 横 穴 墓 群	古 墓	古 墓 後 期	阿金谷字山崎
15	阿金谷(ツン谷)古墳群	古 墓	古 墓 前 期	阿金谷字ツン谷
16	出 持 地 古 墓 群	古 墓	古 墓 前 期	須谷字出雲地
17	鬼 神 谷 (宮 の 下) 遺 跡	遺 跡	古 墓 前 期	鬼神谷字宮の下
18	森 験 古 墓 群	古 墓	古 墓 後 期	森字森駒
19	三 味 ケ 岡 古 墓 群	散 布 地	绳 文	林字三味ヶ岡



鬼神谷駒ヶ岳東方上空より見る

第2章 遺跡の調査

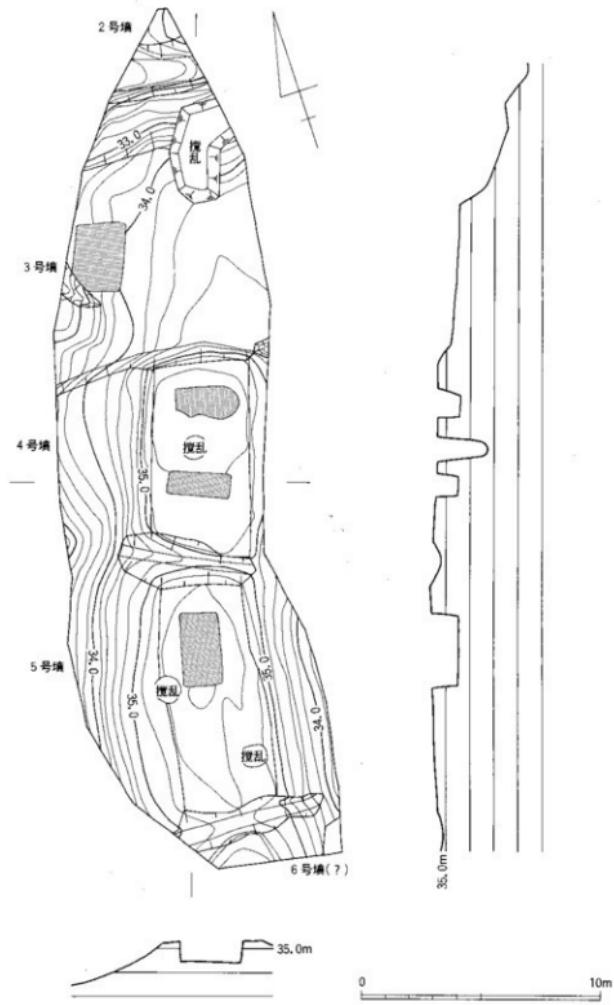


第2図 調査区位置図

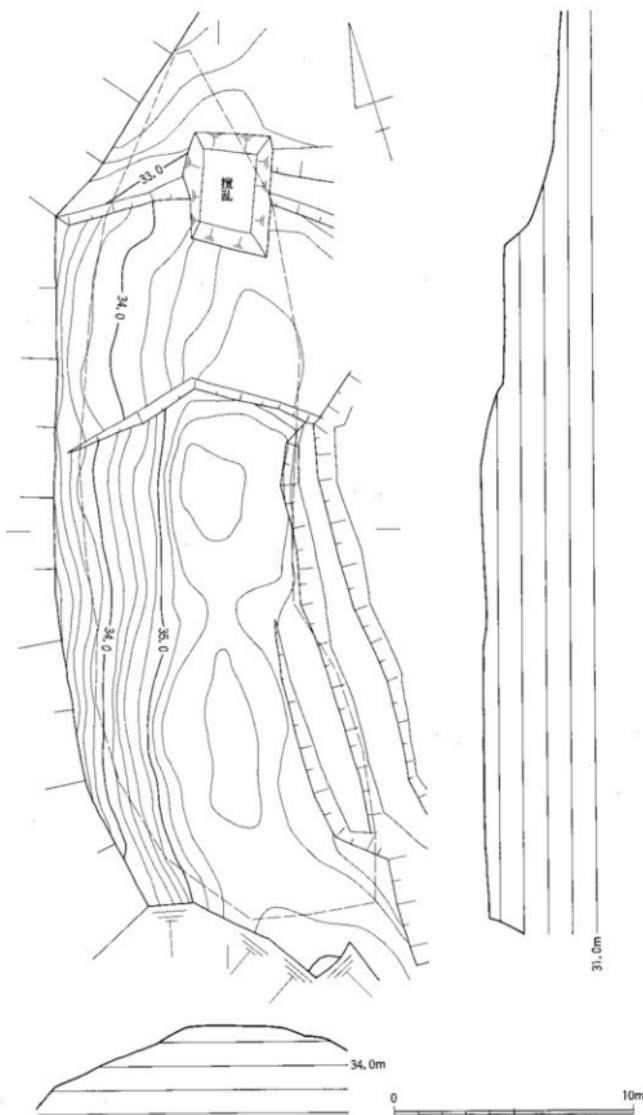
第1節 調査の概要

山崎山古墳群は細い尾根上に存在する。工事実施範囲の東辺がこの尾根稜線を東側にわずかに下がった箇所に設定されているため、調査範囲を官民境界までとしても、特に3・4号墳の墳丘の東側部は調査区外の民地部分となってしまった。

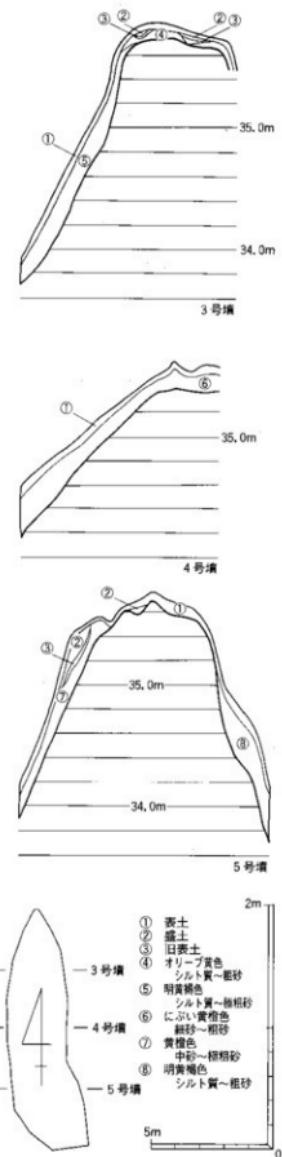
兵庫県教育委員会刊行の「埋蔵文化財分布地図及び地名表」第9集にも、墳丘高1m前後の古墳が2基存在すること記載されている。調査前の地形を観察からも、長さ約10mの長方形墳が2基存在していることが確認できる。北側に位置する山崎山4号墳を一段低くなる北側（3号墳墳丘上）から見上げると、高さ1m以上の墳丘規模を見ることができる。また、旧山崎山2号墳の北側には畠地（休耕地）が一筆開かれているが、所有者の方の語るところでは、戦前に開墾を行ったがそれ以前は同様の尾根地形が続いていたとのことである。のことから類推すると、この畠地にも現在実見できる古墳と同様の古墳が少なくとも1基は存在していたものと思われる。さらに、南に隣接する改良工事の際に重機が本古墳群の上を侵入路として利用したために墳丘の一部が破壊されていたが、上記の畠地内の掘削された箇所で同町教育委員会の松井氏が土師器の破片を表面採集しているため、この畠地の部分も含め全面調査の対象範囲



第4図 調査後の調査区地形図および造構配置図



第3図 調査前の調査区地形図



第5図 調査区横断土層断面図

とした。また、調査区の西側については、尾根稜線部の平坦面から急激に竹野川にむかって落ちる地形のため、発掘調査作業上の安全確保とその下を通過する県道の交通障害とならないよう、尾根稜線から最大約6m下ったところを西の調査区境とした。したがって、2・3号墳の西墳丘は十分に調査区内に納まっているものと考えている。

このようにして設定された調査区は延長約35m、最大幅約10mの南北に細長い不定長方形となる。

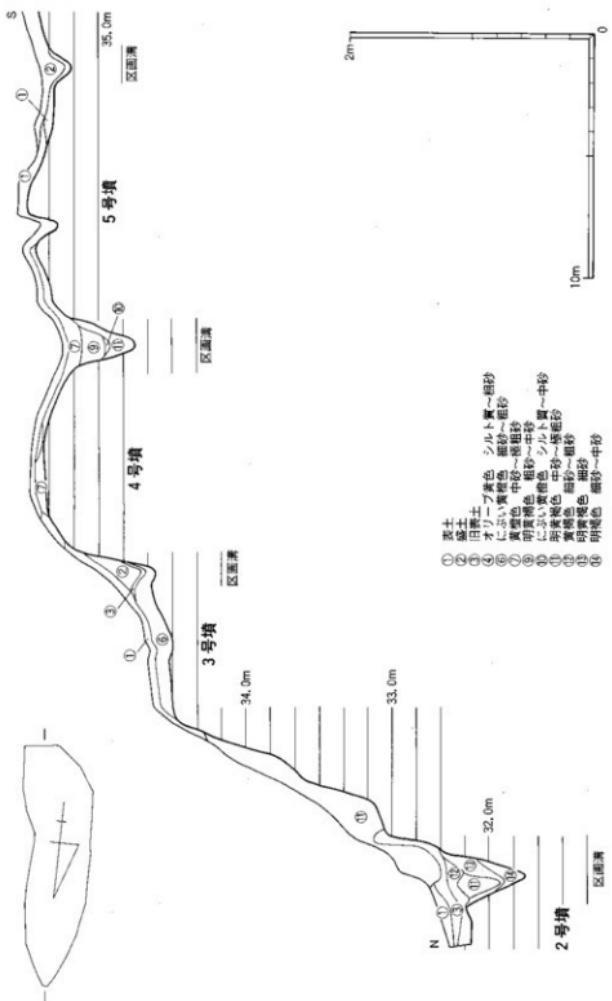
調査対象範囲内の樹木の伐採・搬出の後掘削を行ったが、重機の侵入路がまったくないうえに遺構面までの深度が10cm前後と非常に薄いため、すべてを人力による掘削とした。その際生じる残土のすべては一輪車によって北側の調査区外へ搬出した。掘削に際しては尾根稜線の頂部と、各墳丘中央部の尾根と直交する方向に土層の堆積状況を観察するためのセクションを残した。掘削は残土両端から最も遠く海拔の高い南側から開始し、北に向かって下がりながら遺構面の検出を進めた。

この発掘調査は、同町の青山建設株式会社に工事発注し、平田と井本の2名が調査を実施した。

第2節 遺跡の概要

山崎山古墳群は、竹野川に沿って南から北にのびる比高約30mの尾根稜線上に存し、その尾根の両側、特にその西側は竹野川にむかって急激に落ちる急峻な斜面となっている。調査区は南に高く北に向かって下がり、その比高は約6mとなる。

古墳群が存在する尾根の先端部分は土取りが行われているが、それに伴う竹野町教育委員会の確認調査により、本調査区から北側の区有地内にかけて2基の古墳が存在することが確認されている。さらに今回の調査によって、山崎山4号墳の北側に後世の開墾によって墳丘を消失した古墳を1基と、山崎山5号墳の背後に墳丘を区画する溝と墳丘の一部が検出されたため、同じような状況で山頂部にむかって古墳が連続していたものと考えられる。これに基づき竹野町教育委員会と協議を行い、4号墳の北側に発見された1基を3号墳、5号墳の南に存在していると思われる



第6図 調査区縦断土層断面図

ものを6号墳と呼称することとした。

各古墳は尾根に直交する溝によって墳丘を区画し、盛土をほとんど行わないで地山を削りだす手法によって築成されている。墳丘を区画する溝（区画溝）は斜面の部分にはほとんどおよんでいないうえに、墳丘が地山削り出しによって作られているため、墳丘の規模を確定することは著しく困難であるが、推定される墳丘の規模は2号墳の全長が約9m・幅は約7.5m、3号墳で全長が約11m・全幅約8mと考えている。3号墳については墳丘がほとんど削平されているためさらに不確実となるため、11m前後の全長を推定しているが、幅については想定する根拠すらない。ただ、2号墳と3号墳の間の落差は著しく、2号墳から見上げる本來の3号墳の高さは3m以上に達したものと想定される。この2号墳と3号墳の間の区画溝は幅・深さともに他のものを圧倒して大規模なものとなっている。

4号墳では2基、5号墳では1基の主体部を確認しているが、3号墳は削平のために墳丘がほとんど残存しないため主体部は確認できなかった。4号墳の主体部は墳丘主軸と直交する東西方向を向き、長さ約2.5m、幅約90cmの掘方をもつ木棺を直葬した主体であるが、墳丘を等分割するよう2棺が平行して掘り込まれている。5号墳は掘方長約3m、幅約1.5mと比較的大型の掘方をもち、その中に組合式の木棺が認められていたと思われる。この主体部は墳丘主軸と同一の南北方向を示すが、その位置は墳丘の北側に大きく片寄っている。3号墳の西斜面には小さな平坦面が作り出され、そこに底部が丸い割竹状を呈する掘方の内に長さ約1mの木棺が認められた主体部が1基設けられている。

5号墳の主体部から鉄製刀子が1点出土した以外は、棺内からの遺物の出土は認められない。主体部以外では、2・3号墳間の区画溝内より4世紀後半の土師器の壺2固体、さらに3号墳西斜面の主体部下方斜面より4世紀前半の土師器高杯が出土したのみで、出土遺物総数は著しく少ない。

表2 各古墳規模一覧（単位はm）

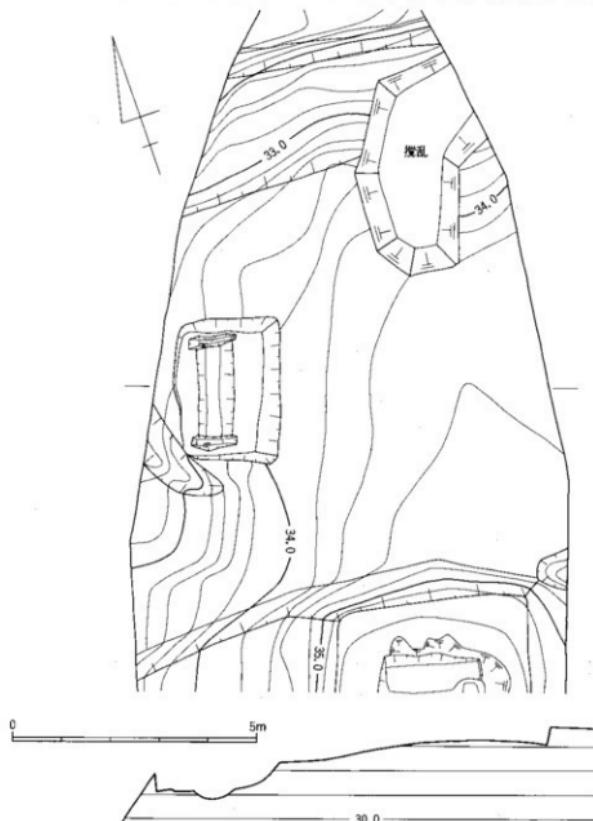
	墳丘長・幅	墳丘高	掘方長・幅	掘方高	木棺長・幅	主体部方位	遺物	お よ び 備 考
3号墳	11.3・不明	15.2	消失	消失	消失	不明	墳丘を後世の削平のため消失	
西斜面墳丘	不明	—	2.9・2.1	0.6	2.1・0.7	北 北 東	墳丘西斜面より土師器高杯出土	
4号墳1号	9.5・7.5	4.6	2.6・0.9	0.6	1.8・0.5	南 東	4号墳と5号墳間の区画溝内より 土師器壺2点出土	
4号墳2号			2.3・0.8	0.5	不明	不明		
5号墳	11.1・8.3	4.5	3.2・1.6	0.9	2.6・0.9	北 北 東	本校内北東部より鉄製刀子出土	



第2節 各古墳の調査

a. 3号墳の調査

3号墳は調査区の最も北に位置する。墳丘部は戦後の開墾により著しく削平されているため、その墳頂部に主体部は残存していない。3号墳とその北に存在する2号墳とは自然地形を利用しているため、墳丘の比高は約2mを計る。南北に延びる尾根と直交する溝によって区画され、その北側の溝は2号墳と共有している。このV字断面の溝は、3号墳の墳丘から溝底までの深さが約2.8mという大規模な溝になる。区画溝は東西の方向とも調査区外へと延びているため全長はわからないが、西側はすぐに崖となっているため、これに取り付くものと考えられる。現長約4.5mをはかり、幅は約1mである。4号墳と共有する南側の溝も、北側同様に地山を掘込んでつくられているが、墳頂部が削平を受けているため、わずかに調査区の東辺で溝の底を検出することができる。溝の東端は調査区外へと続き、現長



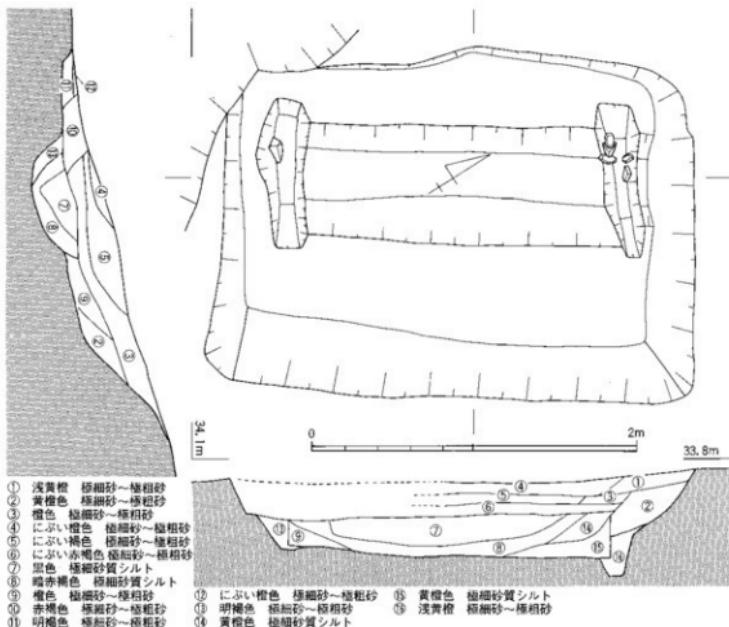
第7図 3号墳遺溝図

約0.7m、幅0.8m、深さ0.4mをみると、西端は北側の区画溝と同様、尾根の斜面へと続く。墳丘は長方形を示し、南北の幅は約8mをはかる。東西の長さはその東側が調査区外となるため、現状で約8mを確認している。

b. 3号墳西斜面の調査

墳丘の西側にはテラス状に傾斜の緩やかとなる斜面があり、そこから南北を軸とする主体部を1基検出した。長さ約2.9m、幅約2.1mの地山を堀込んだ長方形に近い墓壙は底部が丸くなるため、割竹状となる木棺が設置されていたものと思われる。傾斜した斜面を堀込んだ墓壙であるが床面は水平となり、深さは東側で約0.45m、西側は数cmである。木棺は墓壙の西側にずれており、長さ2.1m、幅0.6mで、両小口には小口穴が設けられている。主体部内からの遺物の出土は一切ない。主体部の南西部にみられる細い溝はこの主体部に伴う周溝（区画の溝）の一部とも考えられる。

テラス状の緩斜面の調査区隔より土師器の高杯が3点出土している。主体部に伴うものか、もしくは3号墳の墳丘より転落したものかを判断する事は困難である。さらに、3号墳・西斜面の主体部とも明確な時期決定の要素がないため前後関係を決することはできないが、立地場所の良好な3号墳が先行して構築され、その後に西側の緩斜面に主体部が設けられたものと類推される。



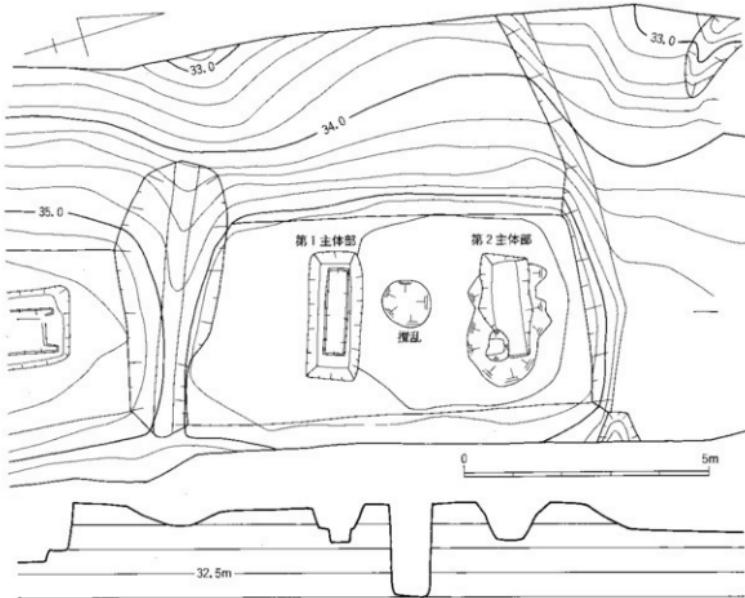
第8図 3号墳主体部造溝図

b. 4号墳の調査

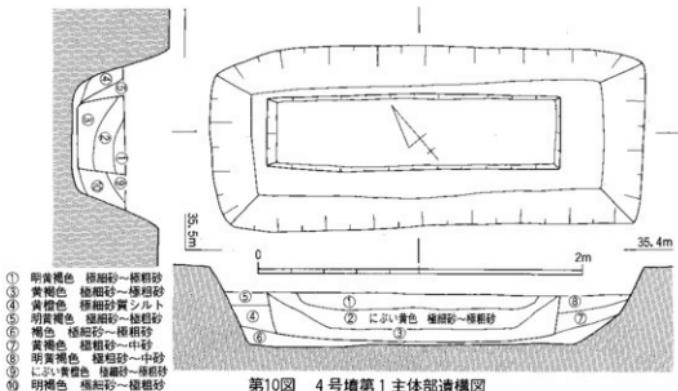
4号墳は3号墳の南側に位置する。3号墳より尾根の山頂側にあたるため、墳頂が約0.6m程高くなる。5号墳とは尾根に直行する溝によって分けられ、その溝を共有する。この溝は長さ約5.7m、幅約0.45m、深さ約0.6mを計る。溝によって区画された墳丘は南北に9.5mとなり、東西方向はその東側が調査区外となるものの現状で約6mを計るが、本来は約7.5mに近い幅となり、長方形の墳丘をなしていたものと考えられる。墳頂部は長さ8m、幅約4mの平坦面となる。

墳頂部には東西方向を軸とする2基の主体部が設けられている。3号墳同様に墓壙は地山を掘込んでつくられている。第1主体部は墳丘中央よりやや南に位置する。長さ2.6m、幅0.9m、深さ0.6mの規模の墓壙には、その北東に片寄って木棺が直葬されている。木棺の規模は長さ1.8m、幅0.5m、深さ0.3mである。棺内から人骨・遺物等はまったく出土していないが、棺底のレベルが若干高いことさらにその方位からみて、北東（東）が頭位になるものと思われる。第2主体部は墳丘の北端近くに位置する。長さ1.8m、幅1.1m、深さ0.6mの大きさの墓壙は第1主体部に比べて一回り小型となる。設けられている位置、規模の差などから判断して、第1主体部がこの古墳の中心人物の埋葬施設として造られたものと思われる。第2主体部は戦時に大きな搅乱を受けているため棺の検出はできなかったが、木棺が安置されていた事は間違いないと推定される。この両主体部は墓壙の西小口が描っていること、さらに並行する位置関係にあることから、ほとんど時間を置かず両者が葬られたものと思われる。

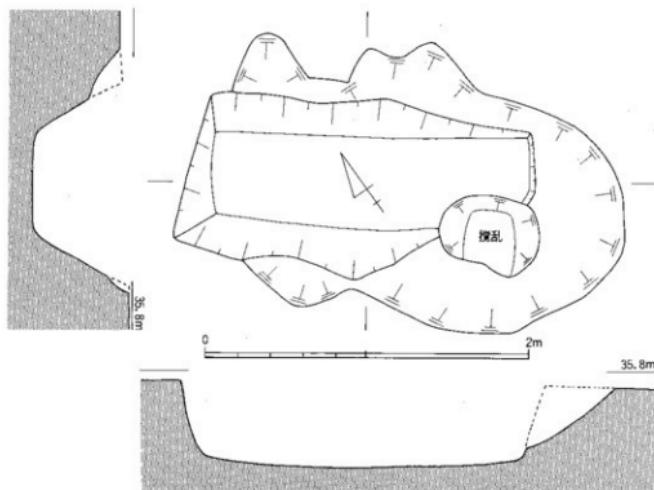
南側の溝内より、土師器の蓋が2個体出土している。出土状態からは4号墳に伴うものか、5号墳のそれかの判断は下せない。



第9図 4号墳造溝図



第10図 4号墳第1主体部造構図



第11図 4号墳第2主体部造構図

c. 5号墳の調査

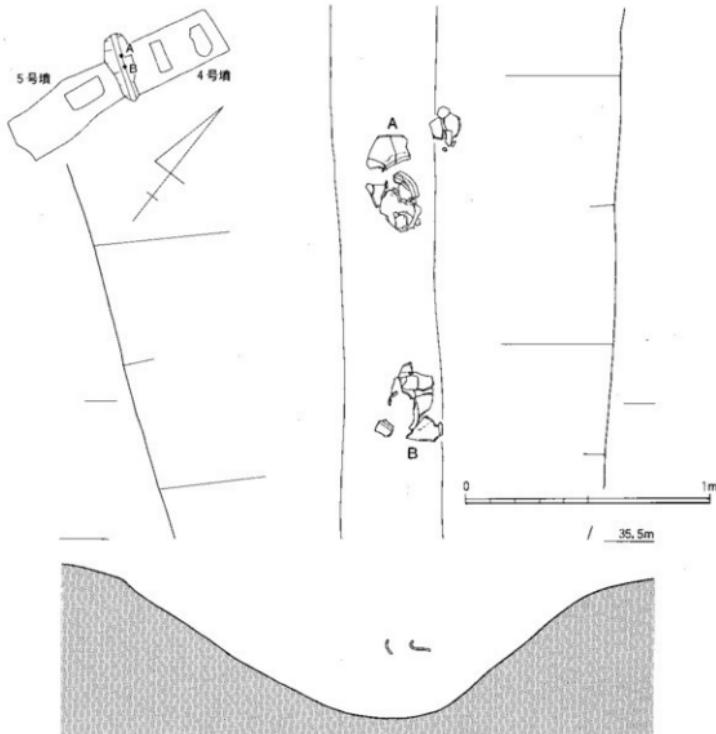
墳丘の延長約11.1mは他の古墳に比べるとかなり長大な長方形の墳丘となり、長軸が北北東の方向を向く。その南西コーナーは、既に完成している南隣接域の工事の際に掘削を受け消失している。東辺の墳丘裾部の南半部はかろうじて調査区内でとらえることができるが、北半部については調査区外となる可能性が強い。一方、西辺裾部は岩盤が露出する自然斜面をそのまま残し、それをそのまま墳丘として利用している。4号墳のように墳丘裾部を削り込み、墳丘の盛り上がりを際立たせるための十分な墳丘整形が行われていないが、その幅は8.3mになるものと思われる。

墳丘は一切の盛土を伴わず地山を削り出して整形しているため、尾根の自然地形の影響を受け、北辺

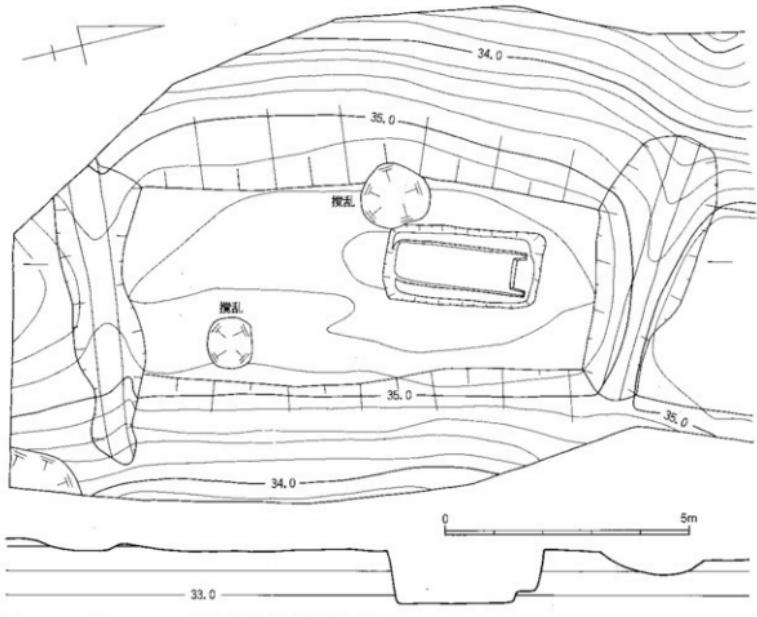
撤部から約4.5mのあたりでわずかに屈曲している。北・南の両端は区画溝によって4・6号墳と区画されている。6号墳との間の区画溝は現長約6.5m、幅約1.5m、深さ約0.3mを測る浅い「U」字型断面の溝であるが、その西端は工事によりすでに消失している。4号墳とも区画の溝によって墳丘が区分されるが、墳丘のレベル自体に2・3号墳間、3・4号墳間のような大きな差は認められない。

全長3.2m、幅1.6m、深さ0.95cmの墓壙をもつ主体部は墳丘の北側に大きく片寄るが、その中軸線上に位置し墳丘と並行する北北東の方向に設けられている。墓壙の壁はほぼ垂直に立上がり、南を除く三方は二段掘となっている。また北小口部は、小口板を側板が両側から挟み込むような平面形を呈する。さらに釘が出土していないこと、小口穴がないこと等から考えて、両側板で小口板を押さえ込む形式の組合せ式の木棺が認められていたようである。側板の長さ約2.7m、小口板間の距離は約2.6m、幅約90cmを測るため、やや幅広の木棺を想定せざるをえない。

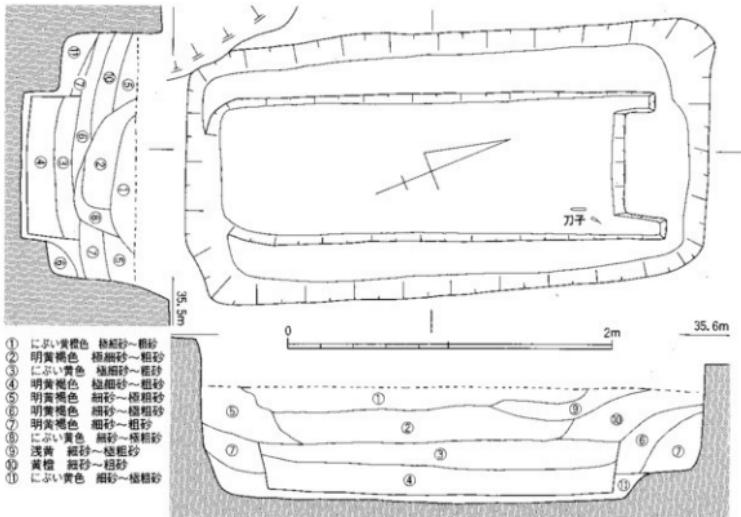
棺内からはその北東コーナー付近から鉄製の刀子1本が、棺底に接して水平な状態で出土したもの、他の副葬品は棺内外とも皆無の状態である。



第12図 4・5号墳間区画溝内土器出土状況図



第13図 5号墳遺構図



第14図 5号墳主体部遺構図

第3節 出土遺物

a. 土器

今回の調査で出土した土器はすべて土師器である。3号墳西斜面の主体部を区画すると思われる溝内より3固体の高杯が出土している。いずれも縦片であり、復元後も完形となるものは見られない。3は杯部の口径18.8cm、4は28.0cmである。4号墳と5号墳の区画溝内より壺が2固体出土している。4世紀後半に相当するものと思われる。

3号墳関連の土器（第15図3～6）

高杯

3：高杯の杯部のみである。杯底部から口縁部へと緩やかに移行し、口縁端部は小さく外反する。内面には中心に向かい縦方向に荒いヘラミガキが見られ、外面は下半に縦方向の刷毛目が施される。色調は橙色を呈し、1mmの砂粒を含む。

4：杯底部と口縁部との境は稜をなした後鋭く屈曲し、口縁部はわずかに外彎しながら大きく外反する。口縁部は内外面とも摩滅のため調整は不明である。外面は明黄褐色、内面は黄橙色を呈する。胎土には1～2mmの砂粒を含む。

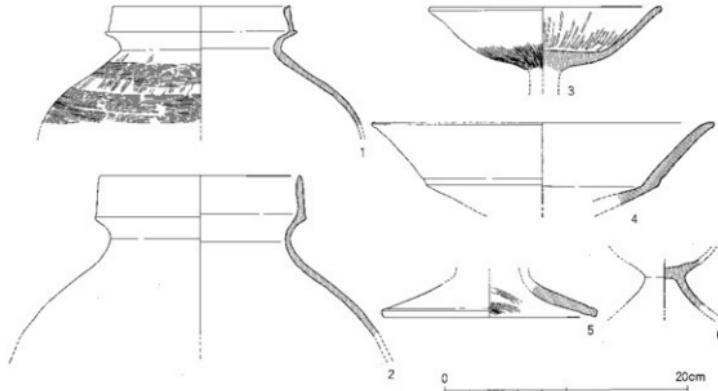
5：高杯の脚据部のみで外面は摩滅のため調整は不明である。据部は直線的に開き、その端部は極小さく屈曲し、外面にわずかな段をなす。内面には横方向の刷毛目が見られる。外面は橙色、内面は明黄褐色で胎土には1～2mmの砂粒を含む。

6：杯・脚部の接合部付近のみ残存する。脚柱部をもたず、杯部から直接脚部が外方に大きく開いていく。摩滅が著しく調整は不明である。内外面とも明黄褐色を呈し、胎土に2mmの砂粒を含む。

4・5号墳関区画溝内出土の土器（第15図1、2）

壺

1：頸部は外彎しながら大きく屈曲し、内傾気味に立ち上がる口縁部との境に鋭い稜をなす。口縁端部は小さく窪み、わずかに内傾する。口縁部には内外面とも丁寧な横方向のナデを施す。胴部内面



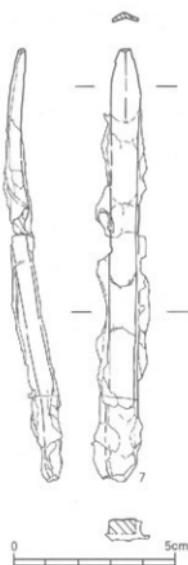
第15図 出土土器

については摩滅のため調整は不明である。その胴部は比較的高い位置で大きく張り出すと思われるが、下半を欠損するため詳細は知れない。胴部外面には縦方向の刷毛目を施した後横方向の櫛目を巡らす。色調は外面が浅黄橙色、内面は橙色を呈する。胎土には1mm以下の砂粒を含む。

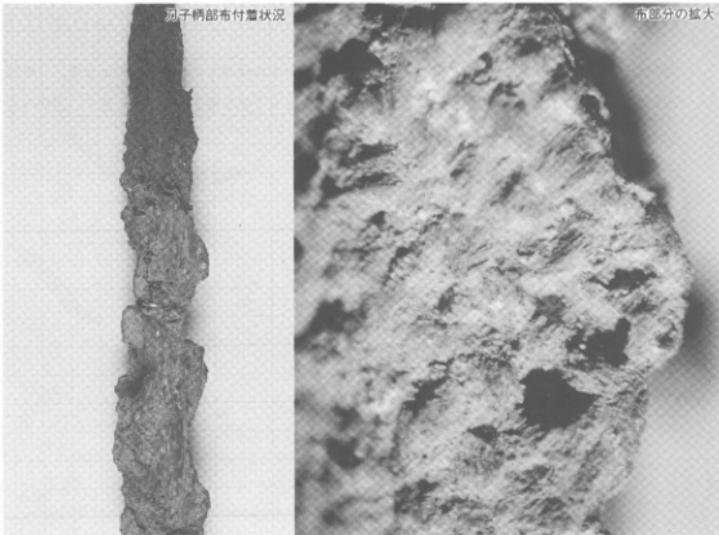
2：口縁部は極わずかに内傾しながら長く立ち上がり、端部は丸くおさまる。頭部は強く屈曲せず、緩やかに大きく「5」字に屈曲する。口縁部と頭部との境には1同様の稜を持っていたと思われるが、摩滅のため遺存していない。胴部は1より下方の位置で張ると思われる。摩滅のため内外面とも調整は不明である。色調は内外面とも黄橙色を呈し、1mm以下の砂粒を含む。

b. 鉄器（第16図）

5号墳主体部の棺内より刀子が1点出土している。出土した時点ですでに2つに折れていたが、接合復元すると全長約13.2cmとなる。幅は刃部で0.9cmとわずかに広くなるものの、他の部分は概ね0.8cm前後となる。刃部は中央に鎬がとおり、裏面もこれに合わせて屈曲するため断面は「へ」字型となる。中子部分には柄の木質との間の一部に布の纖維が認められることから、刀身部を固定するため中子と柄との間に布が巻かれていたことが分かる。



第16図
5号墳主体部内出土鉄器



第3章 まとめにかえて

竹野町内でも農地のは場整備等公共事業に伴う発掘調査の増加により、しだいに貴重な考古学的資料が蓄積されようとしている。現時点では各時代の考证資料（発掘調査された遺跡件数とそれに伴う遺物）が少ないため、その考古学的考察は断片的なものにならざるを得ないのが現状である。そこで本章においては、周辺市町の中でもっとも調査件数が多い豊岡市の事例を参考しながら、山崎山古墳群の性格とその歴史的位置づけを行いたい。

まず本古墳の構築された時期であるが、主体部から土器等の遺物が出土していないため、墳丘上あるいはその周辺から出土した土器によって時代の決定を行なった。とくに、4・5号墳間の区画溝内から出土した2点の土師器壺は4世紀後半から5世紀初頭に属するものであるが、型式的に若干の差異を見る事ができるため、それが4号墳と5号墳の時期差を示すものか、4号墳にみられる2基の主体部の時期差によるものか、あるいは時期差を伴わない型式差なのかの判断は現時点では下せない。その出土状況も溝底より約20cm浮いた同一土層内から折り重なって出土しているため、上記したいずれかの状況を想起することが妥当かと思われる。

参考とする豊岡市域で4・5世紀に属する古墳ということに限定すると、開発件数の頻度に従って円山川右岸の長谷・森尾地域に集中し、その性格も小地域単位集団に属する古墳が多いようである。左岸域では妙楽寺に所在する妙楽寺遺跡群が唯一著名であるが、最近では市域の各地で調査が行われているため、報告書が刊行されたおりにはここに記した状況もかなり変わるのでないかと思われる。

4世紀前半までの様相

この時期を代表するのは、円山川右岸の「東山墳墓群」・「立石墳墓群」と同左岸の「妙楽寺墳墓群」である。東山墳墓群は弥生時代後期の極短期間に形成された墳墓群であるが、他の2群は弥生時代後期から古墳時代初頭までの継続期間をもつ。尾根に直交する溝により墓域（墳丘）を区画し、その区画のなかに多数の主体部が造りこまれる形態はこの時期の墳墓の普遍的な特徴であるが、各墳墓はその内容に独自性が強く、東山墳墓群はいわゆる組合式箱形木棺に鉄製ヤリガンナ、墓壇内破砕土器の供獻という特色があり、立石墳墓群では墓壇上遺物の供獻と限られた主体部への鉄器の副葬の状況が見られる。また、妙楽寺墳墓群は二段墓壇を伴う木棺主体が中心となり、鉄器はその一調査地区に集中しており、全般的に土器の副葬あるいは供獻という状況は見られない。いずれにしろ、一単位集団の墓地として捉えることができるものである。さらに、立石墳墓群は東山墳墓群を含んだ周辺域の小墳墓群とともに5世紀代には北側の尾根に展開して「北浦古墳群」に、妙楽寺墳墓群は南側の「大谷古墳群」に連続するのではないかとも言われている。特に右岸の墳墓群（古墳群）のなかに、三角縁神獣鏡を出土した森尾古墳に至る出発点ともいえる立石107-1号墳・北浦1・8号墳のような首長墓の前段階の様相を持つ古墳とともに、立石105号、妙楽寺墳墓群の見手山古墳のように市域では極数の少ない前方後円墳が含まれることは、この地域の卓越性を顕著に示しているものといえる。しかし、「被葬者の減少とか特殊化まして絶対化といった現象は求めにくく」、「卓越した権力、突出した集団の存在はこの中からは求められない」のがこの段階の地域単位集団の実像のようであるが、墳墓あるいは地区によって主体部の構成・副葬品の内容もちがいがみられるうえに、一基の墳墓のなかにもその中心となる主体部を抽出す

することができるため、すでにこの時期には集団の「長」の優位性を看取ることができる。

この3遺跡以外にも「舟隠遺跡」、「本井墳墓群」、「若宮古墳群」に同様の墳墓が認められるが、その基数は少なく上記3遺跡のようなまとまりは見せていない。またそれ以後の時期の古墳とともに群を形成しているため、前3者よりさらに対象範囲の小さい小集団のもとに継続されたものといえる。

4世紀後半以降の様相

4世紀後半になると古墳の様相が大きく変容する。前代までは弥生時代の墳墓の影響を色濃く残していたが、これ以降その影響がほとんど払拭される。主体部は1基を基本とするが、やはり一部には2基ないし3基のものがみられ、「一墳丘多葬埋」の名で呼称されている。墳丘も溝で尾根を切って区画するものはなくなり、北浦18号墳・立石107-1号墳のように盟主墳に想定されるものはしっかりとした墳丘を作り、その構成員の古墳は狭い平地に造られる傾向が強いようである。その典型が6世紀前半まで継続する北浦古墳群の「階段状古墳」ということになろう。前代の鉄製副葬品では東山墳墓群例のようにヤリガンナが多用されていたが、剣・鎌といった武器類、工具などが中心となってくる。

この時期の代表的な遺跡としては前代から継続する「本井墳墓群」・「若宮古墳群」・「舟隠遺跡」に加え、「北浦古墳群」がある。ただし、「本井墳墓群」は5世紀の極早い時期に作られた1基を以て造墓行為が終了しているため、この古墳群を背景としていた単位集団が消滅したことを窺わせる。「若宮古墳群」・「舟隠遺跡」とも6世紀代まで古墳は造り続けられるが、概ね1世代に1基の古墳が構築されていることから、5世紀前半の段階には地域的な小単位集団の「長」が他の構成員とは隔離された存在となっていることが知れる。ただし、舟隠遺跡3号墳は前期の畿内首長墓級の古墳と類似した鉄製農工具のセットを副葬していることから、「地域首長もしくは彼らに通じる長であることを暗示」しているため、両遺跡を同質的に扱うことはできない。地域的な勢力の不均衡を表すものである。これと対照的なのが北浦古墳群である。18号墳を盟主墳として、ほとんど墳丘を持たない「階段状古墳」が6世紀代まで継続的に造り続けられ、大規模な古墳群を形成している。森尾古墳の元に集約された周辺地域の単位集団が、その構成員として営んだものと考えられている。よって、群を構成する支群の副葬品等の内容は各群によって特徴的なものとなっている。18号墳から北西にのびる尾根支群は最大規模の支群であり、二段墓壇形式の主体部が多く、鉄器の出土点数はきわめて少ない。玉類は全般的に出土古墳が少ないものの25・28号地点に多く見られ、鉄器もこの両地点と27号地点から多数出土している。ただし、これらの副葬品が地形的に条件の良い主体部から出土しているわけではなく、むしろ逆の場合が多い。報告書では尾根支群に細分することを避け数尾根支群をひとつの支群と捉え、副葬品の豊富さから9号墳から18号墳、25号・28号地点の優位性を指摘しつつ、それが時期差か社会的な差かの結論を保留しているが、上記のような状況から尾根支群としての特性を抽出できるのではないかと考える。

以上、豊岡市内における弥生時代後期から6世紀代までの墳墓の状況をおおまかに見てきたが、統じて古墳時代初頭までは弥生時代後期からの墳墓形態が継続しており、細い尾根上に立地する墳墓群は尾根筋と直交する溝によって墓域（墳丘）を区画し、その中に多数の主体部を構築している。墓域内の主体部の方向には統一性がないものの、中心として築かれた主体部を抽出することは可能である。ただ副葬品の状況を見ると、必ずしも中心的あるいは大型のものに卓越した遺物が副葬品されているわけではない。主体部の形態においても各遺跡毎にかなり特徴的であり、妙楽寺墳墓群のように二段墓壇が主体となる遺跡、立石墳墓群のように小口穴を持つもの、東山墳墓群のように組合式箱式木棺に赤色顔料を多用する例など多岐にわたっているが、各遺跡毎の特色が強く普遍性のないことがこの時期の特性かもし

れない。東山墳墓群の墓壇内破砕土器供獻の事例が丹後地域に多く見られるように、各遺跡成立の背景には周辺地域の影響が大きく関与していることも考えられる。

これに続く舟隠遺跡2・3号墳、北浦18号墳、立石107-1号墳等は主体部も単独あるいは2基程度となり、集団墓から「古墳」への被葬者の淘汰が進んでいることが分かる。次世代の地域単位集団が「長」と仰ぐ人物の萌芽がここに見られる。これを支えた集団構成員の古墳については北浦古墳群のように階段状古墳の形態をとるものと、舟隠遺跡、若宮古墳群のように尾根上に盛土を伴った墳丘を構築するものの両者が見られる。この両者の違いはおそらく所属集団の資質の差を証すものであり、集団自体の根幹にかかわる問題から生じたものと思われる。森尾古墳の所在などから政治的に優勢な集団によって形成されたと考えられる北浦古墳群も支群によって特徴的であり、地域単位集団の内部でも分化が続いていることを伺わせる。こうした内なる力が次世代のより一層の権力の集中を生み、群集墳の地域的な拡散をもたらしたものと考えられる。

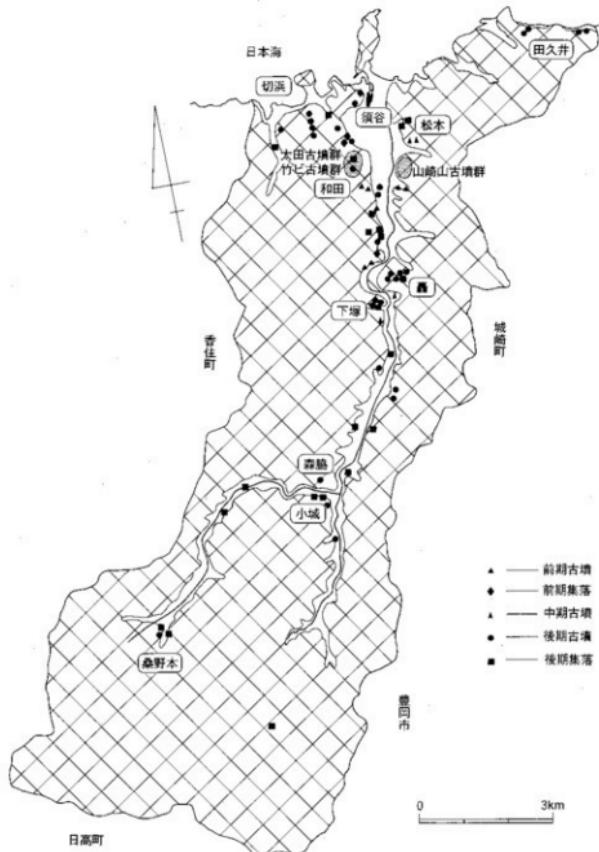
山崎山古墳群の存在とその背景

本古墳群の位置する竹野川流域でも古墳の規模・内容は異なるものの、同様の状態を想起できる。竹野町内の古墳時代の遺跡に限り、前期・中期・後期の3期に区分して竹野川流域の状況を捉えたうえで、本古墳群の性格および歴史的な位置付けを行ってみたいと思う。

まず古墳時代の前期であるが、この時期に属する遺跡は鬼神谷までの下流域に集中している。竹野川左岸の太田古墳群・竹ビ古墳群は中村・御堂谷の両遺跡が母体となって形成され、鬼神谷古窯址群を営んだ丁人集団がホウキ古墳群の母集団ではないかと考えられる。一方右岸では、阿金谷の谷を挟んで山崎山・谷口・阿金谷・出持地の各古墳群が集中している。こちらも母集落遺跡は確認されていないが、小森岡遺跡等が存在する松本地区周辺に存在している可能性が高い。

左岸にある古墳群はほとんどが未調査のためその実態は判明していないが、右岸に付いては今回の山崎山を含め阿金谷・出持地の3群で部分的な調査が行われ、その内容が少なからず明らかとなっている。阿金谷古墳群では前期の古墳が4基調査され、本井墳墓群のように尾根を溝によって企画することにより墳丘を構築し、その墳丘内に複数の主体部が設けられるタイプのものである。規模・副葬品の内容的にも両者は非常に類似しており、同質の母体を扱り所としているものと思われる。出持地古墳群ではその1号墳が調査され、主体部を14基もつ前期初頭の方形台状墓であることが判明した。主体部はいずれも尾根と平行する方向に整然と並び、そのすべては二段墓壙を伴う木棺形となっている。特にその中心となる主体部2は他の主体部に比べ抜きんでて大きな規模を誇っている。こうした大型の主体部であるにもかかわらず、棺内からは鉄製ヤリガンナが1点出土しているのみであり、鉄鎌・鉄剣・管玉類などの特徴的な副葬品は、規模の劣る他の主体部から出土している。主体部の密集状況は前代の形式を色濃く残しており、4世紀後半の舟隠遺跡9号墳に近い形態である。中心主体部の規模と副葬品の内容の不一致は、やはりここでもみることができる。この墳墓からは円形竹管文を施した土器が出土しているとともに、墳丘南コーナーの葺石がカーブを描いて外湾しているため、突出墳等の可能性を考えることも必要ではないかと思われる。また、前期の古墳集中地区が、竹野川を挟んで対峙する位置関係に営まれていることは興味深い点である。

中期になると、松本地区の日南谷古墳群、下塚地区の小山・タキノ下の両古墳と著しく数はすくないが、これは調査の件数が少ないために前期あるいは後期とされている古墳のなかにこの時期のものが多数含まれていると思われる。よってこの時期については、後日の検討としたい。



第17図 竹野町内古墳時代遺跡分布図

後期になると古墳・集落ともその件数は飛躍的に増加するとともに、地域的な分布も町域全域にわたり、ブロック化する傾向が見られる。まず、東部海岸田久井地区に4基の古墳が存在するが、その立地から考えて「海」を背景として成立したものと思われる。竹野川沿いではその北端の一群は川の左岸に限定され、切浜地区のクマヤマ古墳群から須谷地区の小谷古墳群までが含まれる。集落としては切浜・妙見谷・太田の各遺跡がある。その南のブロックは、森・下塙地区にまたがる森脇・城下の両古墳群である。ここでも両古墳群は川を挟んで分布を分けている。森脇古墳群には森脇遺跡が対応するものと思われるが、城下古墳群に伴う集落は未発見かと思われる。その上流の森脇・小城地区にはわずかに3基であるが、長井谷古墳・神原古墳・ヨコズ山古墳がある。長井谷古墳は不明であるが、神原古墳には熊田遺跡と角谷口遺跡が、ヨコズ山古墳には谷田遺跡が付随するものであろう。さらに、竹野川の最上流

部に近い桑野本地区には町域の南部では唯一の稻藏古墳が存在し、稻藏遺跡と竿田遺跡のいずれかが母集落であったことは確実と思われる。

このように、後期には竹野川流域を中心として5ブロックの古墳集中地区を抽出したが、中心的なのは前期古墳の分布する下流域の2ブロックであり、上流に遡るにしたがって古墳の数は確実に減少していく。この状況は取りもなおさず、背景となる母集落=単位集団の政治的・経済的な力の差を示すものである。ただ、いずれのブロックにも全時代を通して首長墓と成り得る古墳が現時点で確認されていない事実は竹野川流域、もっと端的に言えば下流2ブロックの上位権力に対する地域的な劣性としてとれるべきかもしれない。いずれにしろ、地域ブロックの中に集落と古墳群がセットとなって捉える点は非常に教科書的で、古墳時代の地域体制を考えるうえでは典型的なモデルケースといえよう。

さて、豊岡市内の古墳の状況と竹野町域の古墳の分布状況から推測し、山崎山古墳群は近接する阿金谷古墳群あるいは本井墳墓群に類似した形態の古墳群を考えることが最も妥当かと考えられる。豊岡市域でも弥生時代後期から古墳時代の極初頭にあたる妙楽寺遺跡・東山墳墓群・立石墳墓群などは一墳丘に多数の主体部を持つが、4世紀後半から單一葬あるいは二棺程度の羨葬となり「古墳」の形態に近付く。竹野町域では前者は出持地1号墳であり、後者が山崎山古墳群あるいは阿金谷古墳群に相当するが、時間的には出持地1号墳が山崎山・阿金谷両古墳群にわずかに先行して出現する程度である。山崎山5号墳の山頂側には分布地図には記載されていないものの、さらに数基の古墳状の高まりが確認できる。

また、竹野町教育委員会が調査をした尾根の先端部にも未周知の2基の古墳が確認されているため、



ジャガシラ山の南に分布する谷口古墳群を含め、30基以上の町内では最大規模の前期古墳群になるのではないかと思われる。その中には、出持地1号墳と並ぶ時期・内容の墳墓が存在している可能性も十分に残されている。また町教育委員会の調査により、先端の1号墳が箱式石棺を内部主体としていることから、中期古墳が少數ながら含まれているようである。このように考えると本古墳群の性格は大きく変質し、群構成としては豊岡市の舟隠遺跡あるいは若宮遺跡と同じような長期継続の古墳群となる。ただ、その社会的な意義は豊岡市における両遺跡とは格段に異なり、竹野町内における北浦古墳群につながる舟隠遺跡・東山墳墓群・立石墳墓群と同質の地位を考えてさしつかえないのではないかと思われる。ただし、森尾古墳・立石107-1号墳・北浦18号墳などの首長墓もしくはそれにつながる古墳が確認されていない点が、根本的な社会資質の違いを表しているものであろう。

第18図 山崎山古墳群分布図

調査後記

但馬の人たちはよく働く。いやいや、「但馬の人たちも」よく働くと言った方がより正しいかもしれません。山崎山古墳群の調査地区は北高差30m程の細い痩せた尾根の上にあるため、最近の発掘調査では珍しく樹木の伐採から遺跡の完掘までの一連の作業をすべて「人の手」で行いました。

「あんたらも若いのによお働きなさる」と作業に来てくださったおじさんたちに言われ、「いえいえとんでもありません」と照れてみたものの、冷静に考えてみるとおかしなことです。わたしたちは年も若く働き盛り、おじさんたちはといえば自分の父親と同じような年齢の、いわば初老の人たちばかり。若い者がよく働いて当然なのに、「若いのに・・・」といわれるはどうしたものでしょう。日本の若者はそんなに「労働」しなくなっているのでしょうか。

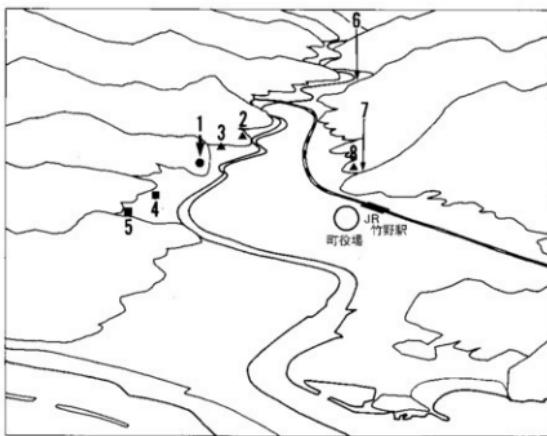
5号墳の墳丘にある直径1mあまりの「遺構」を掘っていると、「これはタコツボだがな」とおじさんが言われます。山の上に「タコツボ」とは奇妙なことを言われると思い詳しく話を窺うと、第2次世界大戦の終戦間際に日本海から上陸してくる敵に備え、立籠るために掘られた穴だということです。海岸部周辺の山々にこうした「タコツボ」を当時多數掘ったのだそうです。戦争という暗い過去の体験を話して下されるおじさんたちに、あの忌まわしさが微塵もないのは、「あれから半世紀」という長い時間が過ぎてしまったためでしょうか。

「タコツボ」の発見から考えて、山崎山古墳群の被葬者も死してなお古墳の中から多くの戦乱・戦争を見てしまったことだと思います。彼らも、今日わたしたちが満喫しているこの平和の日々を、一千年もの間待ち望んでいたことでしょう。今日なお世界の至る所で悲惨な戦争が展開され、多くの人たちがその犠牲となって悲しい日々を過ごしています。わたしたちが獲得したこの「平和な日々」が永遠につづき、全世界のすべての人たちを覆い尽くしてくれることを望まずにはいられません。埋蔵文化財を対象としているわたしたちの仕事が直接平和への運動につながることはほとんどないと思われますが、同じ地球家族の一員としてみんなが幸福になってほしいと望むばかりです。

世界に平和を。全地球家族の幸福のために。

図 版





1. 山隣山古墳群
2. 出持地古墳群
3. 阿金曾古墳群
4. 小森古墳群
5. 見戴古墳跡
6. 鬼神谷古墳跡
7. 大田古墳群
8. 竹比古墳群



竹野川遠望（河口より上流を見る）



調査区全景（右が北方向）



調査区遠景
(西上空より)



同上
(北より)



調査区からの展望
(北をみる)



調査前全景
(北より)



調査後全景
(北より)



同上
(南より)

3号墳全景
(北より)



主体部および
木棺検出状況
(南より)

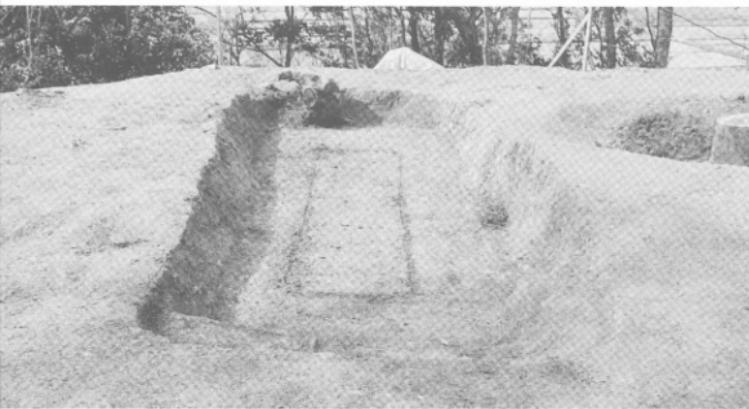


主体部
完掘状況
(南より)

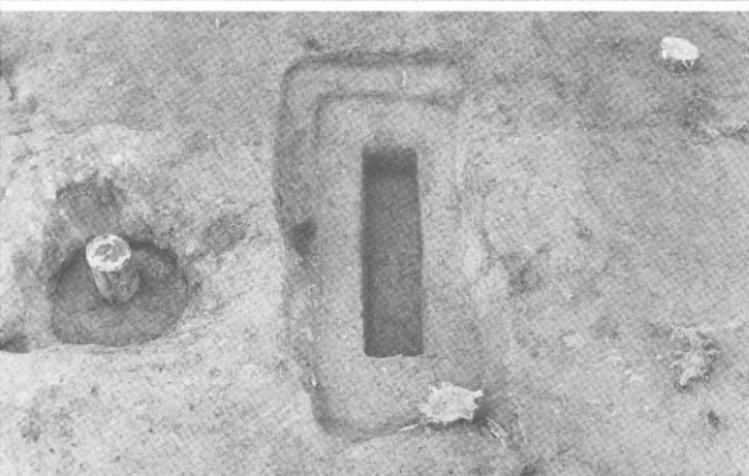




4号墳全景
(北より)



第1主体部
木棺検出状況
(東より)



第1主体部
木棺完掘状況
(西より)



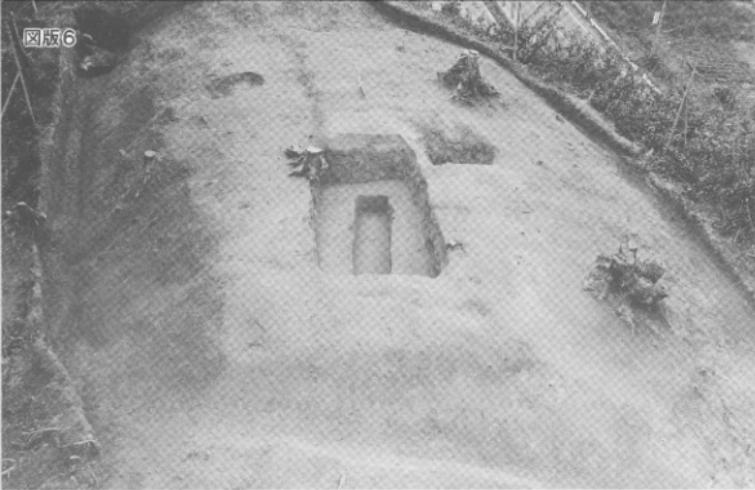
第2主体部
完掘状況
(西より)



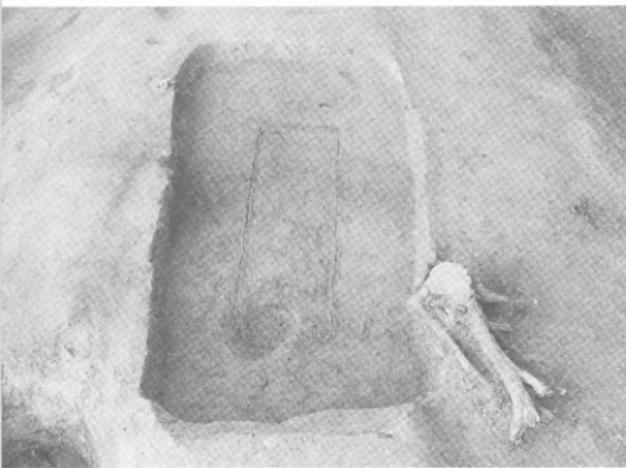
4・5号墳間
区画溝内
土器出土状況
(東から)



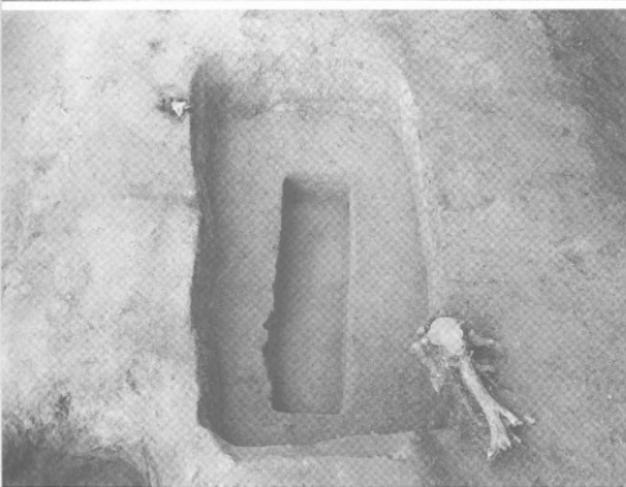
3号墳西側部
土器出土状況



5号墳全景
(北より)

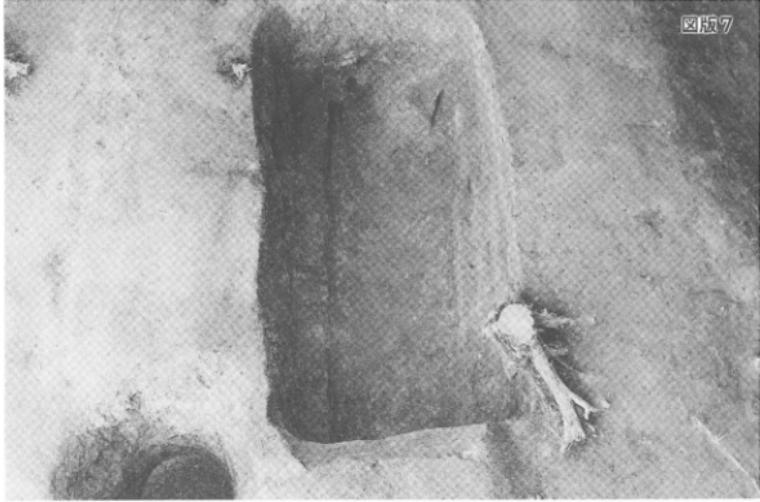


木棺検出状況
(南より)



木棺完掘状況
(南より)

5号墳



主体部完掘状況
(南より)



北小口の状況
(南より)



鉄器出土状況
(南より)



2・3号墳間
区画溝
(北東より)



同上断面
(西より)



3号墳
墳丘高まり
(北より)



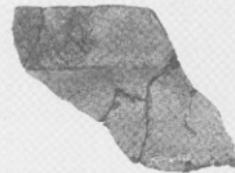
1



3



7



2



4



4



5

兵庫県文化財調査報告 第136号

山崎山古墳群 発掘調査報告

平成6年12月20日 発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区舞田町2丁目1-5
電話 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 水山産業株式会社
〒658 神戸市长田区二番町3丁目4-1
電話 078-577-3757㈹